

## 彙報

## 新著紹介

## 哲學會例會

五月三十日午後六時より學生集會場に於て新入學生の歡迎河瀨文學士の送別を兼ねて例會を開く、波多野西田朝永田邊の諸博士其他約三十名來會、左の講演あり

Rickert : Philosophie des Lebens

文學士 河瀨 憲次君

## 心理學讀書界

六月二十日心理學實驗室に於て左の講演を行へり、野上教授黒田岩井務臺其他學生多數參會、

K. Bühler : Uber Gedanken

文學士 大脇 穠一君

## 倫理學會

七月一日午後六時半より學生集會場に於て次の講演を開催す  
マルクスの理想社會 經濟部教授 河上 博士

## 二程子の哲學

宇野哲人博士著

東京大學に於ける支那哲學史家の重鎮として且つは最近「洙泗源流考」といふ論文の提出により光榮の博士號を贏ち得たる宇野博士の名に於て「二程子の哲學」が出版せられたと聞き心竊に大なる期待を以て此の書に面した、然し此書の序文を讀んで此書が著者の文科大學卒業の際、井上哲次郎博士の「東洋哲學史」の修了試験に應ずるため作つたものを嘗つて井上博士の勸奨により哲學叢書にも收めたものを昨年末又書肆の勸奨によつて只魯魚の誤を正すだけにして出版したことを知つて大なりし期待は裏切られて讀まうとする興味の大部分の失はれたのを感じた。讀つて考へると此書は宇野博士に取つては出世作さといふべく之によつて博士の才能が認められ、今日あるを致した紀念すべき勞作であると共に約二十年前の博士の氣鏡を偲ぶに足るものであるから、茲に更に勇氣を喚起し敬意を以つて此書を讀了し其の内容の一斑を紹介することにした。

此書は序論。明道程子の哲學。伊川程子の哲學。結論(二程子の比較及其影響)より成立つて居る。序論に於て博士は一般哲學の起源に筆を起し東洋哲學研究の必要なる所以を論じ、西洋哲學史と支那哲學史との比較をなし、更に進んで支那哲學史を一、上代(先秦)二、中古(漢魏六朝唐)三、近世(宋以後)の三期に區分して各時代の哲學の主潮と先後の思想の論理的關係を概括的に敘述し

二程子に至る思想發展の徑路を明にして二程子の思想の意義を傳説を心理解するに便にして居る、其の叙述の仕方、老巧なものには思はず感歎し博士の早熟に敬服せざるを得なかつた。勿論此の部分で叙べてあることは博士自身が獨創的研究の結果を概括したものではなく、井上博士の講義を聽いて得たる知識を手際よく概括的に述べたものであると言へば言はれやう。が兎に角博士の早熟の才人であることは此の部分に於て既に明瞭に認め得られ、吾々自身の現狀を顧みて愧怍ならざるを得ない。

明道程子の哲學の部分は第一章事蹟第二章學問の二章から成り立ち第二章は學系。學風と第一節純正哲學。第二節實踐哲學。第三節異端論。第四節批判とに分たれ第一節はまた一、宇宙論二、人生論に第二節は一、倫理說(イ)性論、(ロ)修身の工夫二、教育論三、政治論に分たれて居る。第一章には明道の出生、家系、幼時を述べ、次に官吏生活中の治蹟を九ヶ條に分つて述べ、終に其の爲人を説いて居るが、仕宦中の治蹟として擧げてあるもの、中には直接には彼の思想を理解するに不必要なものもあつて、稍詳細に失した感がないでもない。第二章の學系の條に於て博士は普通に程子の學は周茂叔より出で居ることを説き否定して、幼時從學せしことあるも其の感化は決定的のものでなく伊川の言の如く程子は老釋に出入すること數年殊に釋氏の學に刺戟せられ啓發せられたが遂に語を六經に度求して一家の學を組織立てたと言つて居るのは蓋妥當な見方であらふ。學風を叙した條に明道の學問は直覺的に識仁定性の二篇が明道の學問を知る上に重大なものとして其の全文を譯出して居る、第一節純正哲學の宇宙論に於て明道は萬

物は二氣の細縷して生ずるところのもの、地は結局は天である、故に萬物は天より出る、而して道は即器、器即道で一元論である、人々禽獸草木の間に差異のあるのは陰陽の二氣の交感の度に偏正の別あるところより生じ人は天地の中正の氣を享け心性が明靈で推理力があるが他の物は偏して居り従つて推理力がないその明道の説を述べて明道の宇宙論は易の思想より出で一元論に歸着すると説いて居る、次に人世觀に於ては明道は道は即ち性、性は即ち天、心性は天人合一の契機であるから物我一體の理を悟り死亡を超越しなければならぬと説いて居る、第二節の實踐哲學の倫理說の下には程子以前の性說の大體を述べ明道は本然と氣質を區別せず天地生生の徳を繼いで之を成すものは性で、絶對的に一へば性は至善であつて性即ち氣、氣は即ち性である、乾元の氣を禀くる時偏正の度を異にするところより性に善惡の區別を生ずる故に善も性、惡も亦性と言はればならぬ、心、性、天は一で禽獸にも心はあるとして居ることを説いて居る、教育說としては明道は教育の目的は道を修むるにありて道即性であるから性を修むること、もなり、本來人間の有するものを自覺せしむるもので外より加へるのではなく、特に兒童教育の重んずべきを主張して居るのを擧げて居る、政治論には君道及師傅、六官、經界鄉黨、貢士、兵役、民食、四民、川澤分數の十事を論じて居るのを載せてある、第三節の異端論は明道が儒教以外の學問に對する批評を述べてあるが特に佛教の説を駁した論即死生說の批難、心迹不二の論、出世出家論、地獄方便說の駁論を説いて居る、第四節の批判の條には明道の學風が禪學に近く直覺的にして簡易であるとし、

次に宇宙論に於て二氣交感に偏正過不及を生ずる理由を説かざる缺點及性論に於ける氣境に善惡ある理由の説又は正偏は「を標準として區別するかの説明を缺用せる弱點を指摘し、進んで修學の工夫政治論等につき逐次批評をなして居る。

伊川程子の哲學を述ぶるに當つても項目分けは大體明道の夫と類似して居て第二章には伊川の學說を説き、伊川の上疏、經筵に侍する際の使用態度、進講の心掛けの嚴肅であつたこと述べ又洛蜀（洛は伊川學徒、蜀は蘇東坡の學徒）の争についても詳しく述べて居る、第二章の學問の處にては明道と伊川との學風を比較し明道は徳性寛宏、規模濶廣、其學は簡易直截であり伊川は氣質剛方、文理密察、其學精緻親切であると評してあるが斯の批評は既に古人（黃宗羲等）の爲したところである、第一節の純正哲學の條に伊川の宇宙論は理氣二元説で陰陽は氣で形而下。道は理で形而上。陰陽は道でなく陰陽する所以が道であるとして居るのを述べ伊川の現象即實在の考へは華嚴の四法界觀から得來つたものではあるまいかとも言つて居る、人生觀としては伊川の天人合一の理。天道は即ち人道であるから盡性が其の眼目で從つて誠を得て死生一如たることを悟得しなればならぬとの考へを有して居たと説き第二節の實踐哲學の倫理説には性は天より出で性は即理で聖人も凡人も同じ性を有して居る、人に不善の存在するは人性は本と善なれど不善のあるのは才の罪で才は氣より稟け氣には清濁があるから養復性が倫理生活の標的である、一人の心は即ち天地の心で公であらねばならぬ、公であれば一であるが私があれば萬殊である、心も亦性である、外に應じて内に發するものが情であること此

節には明道の場合と異なり、智識論を加へて、智識は先天的のもので人間には良智があり、夜氣の存するところが良智であつて智と心は合一するものであると主張する伊川の説をあげ善を修むる工夫は持敬にして敬とは主一無適である、誠を存じ靜坐して工夫し格物して窮理し始めて智を致さねばならぬとの説を述べて居る、學問論には學問の目的は倫理道德にあり文學は卑しむべきもの詩は無用の閑言であり、教育については氣質を變じ徳育を重んじ小成を尊んで習慣を重しなればならぬとする伊川の説を述べて居る、次に禮論があるがこれは明道の條には無いものである、禮論には伊川の禮は情性に本づき聖人の裁制せるもの時により因革すべきものであるとせるを述べ政治論には三本、（立志、責任、求賢）の説非田論をあげ三節の異端論は明道よりも一層激烈偏狭なる考へを以て心迷不判、出家、出世、無觀、成住説、印證説を駁した論をあげ第四節に伊川の學問の批判をなして居るが内容は多く前節に既に説いたものを繰り返してあるに過ぎぬ、最後の二程子の比較及其影響を結論として論じて居るが此も大體從來述べ來つたことを終括して居るもので特に傾聽するに足る新觀察はないやうである。

要するに二程子の哲學の一書は種々なる項目の下に極めて手際よく二程子の學説をまきめて叙述してあつて別段取り立て、指摘する誤謬は見當らない、博士が壯時より明快にして器用な頭腦の所有者である事に驚く、然し宋元學案なり二程今書を一通り読んで居るものには、此書を讀んだがために新しい事項を教へらるゝことは少ないやうに思はれる、博士が二十年以前の此の著作

を再び出版するに至つた動機に至つては吾々の了解に苦しむ節もないではないが吾々は博士が後學の者乃至は支那學に素養薄き民衆に對する啓蒙的親切心の發露からなされたこと、推測する、斯く推測すれば此書は啓蒙的功績を充分に收獲する事は出来やうが多少なり宋學に造詣ある者を裨益するか否かは吾々には速断は出来ぬ。二十年の歲月は徒爾では過ぎない、吾々は博士の名を日本の支那哲學研究史に不朽にするために博士が更に二十年間に蓄積した學殖を傾倒して進歩に上せる博士が今日如何に二程子の學說を理解するかを垂示して一には専門の支那學者を裨益し、二には二十年間の努力が如何に偉大貴重なるかを吾々後學に實證し吾々をして奮起するところあらしめば幸之に過ぎるものはない。

(浦川、東京大同館發行正價貳圓)

贈寄書籍雜誌

テユウキ一書  
哲學の改造

文學士 中島 慎一 譯  
東京 岩波書店

京都帝國大學第十二回講演會

八月一日より同十日迄の間に於て左記の講演開催の筈。

一、申込期日 七月二十日限り

エルンスト・グローセ著  
藝術の起源

東京 安藤弘譯  
岩波書店

智識の問題(カント認識論の解釋)

東京 村岡省五郎著  
岩波書店

ヘンリー・マーシャル著  
美の原理

東京 相良徳三譯  
大村書店

研究參考  
教授法及管理法

同 博文館編輯部編  
館

同 上  
東洋倫理學

同 上

同 上  
倫理學史

同 上

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、宗教研究、東洋哲學、六合雜誌、日華公論、學校教育、教育、内外教育評論、教育學術界、教育研究、教育時論、中等教育、教育問題研究、文化運動